

文字もじMOJIの世界

6. 最近の筑紫書体開発で思うこと

藤田 重信*



図1-1 「森」の書体設計デザイン。左はマティス（従来型の真四角なデザイン）、右は筑紫Q明朝（文字固有の形を生かしたデザイン）



図1-2 上はマティス（従来型の真四角なデザイン）、下は筑紫Q明朝（文字固有の形を生かしたデザイン）

近年、開発した筑紫書体「筑紫オールドゴシック」「筑紫アンティーク明朝」「筑紫アンティークゴシック」「筑紫Q明朝」があり、なかんずく最初の2書体は新刊の単行本の装丁で大変よく見かける。それもリリースして1～2年でのそういう状況に自分自身驚いている。後の2書体もリリース直後から目を見張る早さで使用されているのだが、実はこれらの書体は今までの書体とは決定的に違うところがあり、そこが使用される最も大きなポイントになっているのだと考えている。

明治時代から現在まで基本書体と呼ばれる「明朝体」「ゴシック体」「丸ゴシック体」の設計デザインは漢字の文字を正方形（真四角）にすることだった。全メーカーの書体が、ほぼ例外なく、そうデザインされている。しかし、近年リリースした筑紫書体は正方形（真四角）ではなく、文字固有の形を

尊重した設計デザインとしている。「森」の文字は普通に手で書くと全体が自然に三角形になる。その三角形が「森」が持つ固有の形なのだ。（「今」＝ダイヤ形、「喜」＝縦長方形、「工」＝横長方形など様々）ところが従来の書体設計だと、なにがなんでも真四角正方形のデザインなのだ。この違いは、三角形の「森」は森という有機的風情を伝えるが、真四角の「森」は符号的に森ということ伝えてるように見える。（図1）

装丁家は、小説・詩・エッセイ等、タイトルを表紙に組む場合、

風情を伴わせたい場合が多くあるのではないだろうか。そこに書体はまっぴらと感ぜ、そしてテキストが雄弁に語っているように見える。（図2）

筑紫書体は、これから2～3年以内に「筑紫A・B ヴィンテージ明朝」「筑紫アンティーク丸ゴシック」「筑紫AM ゴシック」（いずれも仮称）と現在開発中の書体が続き、そのどれもがエモーショナル（感情的）な風情を保持するようデザインしている。これらの書体サンプルをお客様に見せると目の色が変わり『いつ出るのです

美しく高貴な男女
美しく高貴な男女

図2 書体によるテキストの印象の違い。上はマティス（従来型の真四角なデザイン）、下は筑紫アンティーク明朝（文字固有の形を生かしたデザイン）

東京と京都の冬

東京と京都の冬

図3-1 従来型の真四角なデザインの例。上はニューロダン（ゴシック体）、下はマティス（明朝体）

か?』と聞かれる。「いいですね」とか「いいと思います」といった、どこかお世辞が入った言葉ではない。あればすぐにでも使いたい、という言葉が「いつ出るのですか」なのである。そろそろ筑紫オールドゴシックから順番にファミリー化をしなければいけない時期に来ているので、その後にも……と言うと「いえこちらが先です」と言われる。実はそのお客様は、私に会うなり「筑紫オールドゴシックの細いのが早く欲しいんです」と言われた方なのだ。本当に早く手にしたいとの熱を感じる。

このように皆様に反応していただけのデザインだが、「なぜ今まで100年以上ある歴史の中で開発されなかったのだろうか?」という疑問に突き当たる。これは正方形（真四角）にデザインした書体のメリットを考えると1つの答えにたどり着くように感じる。それは「文字が大きく見え、どの文字も揃った大きさに見える」。このことが「行」に凸凹がない「揃った美」と大きく見える文字のため「読み取りやすさ」をしっかりと獲得し、印刷文字として現在まで定着してきたのだと思う。しかし、近年開発の筑紫書体は“1つの欠

東京と京都の冬

東京と京都の冬

東京と京都の冬

東京と京都の冬

東京と京都の冬

図3-2 文字固有の形を優先したデザインの筑紫書体。近年リリースしたもの。上から、筑紫オールドゴシック、筑紫アンティークS明朝、筑紫アンティークゴシック、筑紫Q明朝

点”がある。漢字を正方形ではない、文字固有の形を生かしたデザインにしているので、ベタで組むと従来の書体より文字が90～80%のサイズで小さく見えてしまうことだ。これはボディサイズが固定されている金属活字時代には「小さくて見えにくい」となってしまう致命的な欠陥だったと想像する。

しかし、写植時代には1つの字母で大きく印字ができるシステムになった。文字間もツメをプラスすることでまったく欠点でなくなる項目だった。

では、なぜ写植時代でも生まれなかったのか?

写植時代前期は活字時代の書体そのものを写植化し、後期の基本書体はフトコロを極限にまで大きくした正方形（真四角）デザインが誕生した。それらモダン書体開発が時代の中心であり趨勢だった。そしてバラエティ書体の誕生から多書体開発発展の情熱に終始したのかもしれない。

DTPの時代に入った初期の頃は「書体が少ない、少ないよ。」と言われていた。20数年が経ち、いつの間にか「何でこんなに膨大で覚えきれないほどの書体が世に

東京と京都の冬

東京と京都の冬

東京と京都の冬

東京と京都の冬

東京と京都の冬

図3-3 文字固有の形を優先したデザインの筑紫書体。開発中のもの。上から、筑紫Aヴィンテージ明朝、筑紫Bヴィンテージ明朝、筑紫アンティーク丸ゴシック、筑紫AMゴシック（いずれも仮称）

あるの」と言われ方も変わり、一見なにに不自由ない今、ようやくフトコロの締まった筑紫書体が必要とされ始めているのかもしれない。画面を見ながら文字のポイント数を調整でき、文字ツメも機能をONするだけでいい時代。そんな現代で生き生きとしてくる明朝・ゴシック・丸ゴシックなのである。筑紫書体が、これからの組版印刷表現に、新たな世界を広げていってほしいと願っている。

(つづく)



*FUJITA, Shigenobu
フォントワークス株式会社
書体デザインディレクター
〒812-0026 福岡県福岡市博多区
上川端町13-15 安田第7ビル7階
Twitter : Tsukushi55